

「ノルウェイの森」における 村上春樹ワールド

～表と裏の世界～

中三十七

◎飯田 紘士

尾崎 翔太

清水 寛和

鈴木 裕也

第三章

第五節 「僕の生と死」

この節では「僕」の〈生と死〉について考えてみようと思う。物語の終盤、「僕」のまわりの人物が次々と自殺していく中で「僕」は

なあキズキ、お前は昔俺の一部を死者の世界にひきずりこんでいった。そして今、直子が俺の一部を死者の世界にひきずりこんでいった。(下巻 一百三十一頁十行目)

と明らかに〈死の世界〉へ向かっていく。そして物語は「僕はどこにいるんだ」とよくわからないまま終わってしまう。

そこでこの節では死者が「僕」に与えた影響と「僕」の変化、そして結末について考えていきたいと思う。

この論文の第一章やこの章でも触れたように「僕」はキズキ・直子が〈外の世界〉へ出るためのかけはしとなっている。しかしながら〈外の世界〉との接点であったはずの「僕」も、〈内の世界〉の住人とばかり交流しているうちに、少しずつ〈内の世界〉に閉じこもりがちになってしまう。例えば「僕」が〈外の世界〉へ戻れずにいる阿美寮の人々とばかり接し、〈外の世界〉の人々と接点をしばらく断っていた状態で寮に戻った場面だ。

僕はだんだん頭が混乱して、何がなんだかわからなくなってきた。(中略)暗闇の中で、僕はもう一度直子のあの小さな世界へと戻って行った。(下巻三十八頁二行目)

〈内の世界〉になじんでしまった「僕」は〈外の世界〉に適應できず、さらには直子の〈内の世界〉に閉じこもってしまう。

そんな閉じこもりがちの「僕」の心を開かせ、「僕」を〈外の世界〉へと導くのが緑である。緑は「僕」が阿美寮から戻った次の日「漠然とした顔をしている」「目の焦点があっていない」と以前の「僕」との変化に気づくと、「僕」をバーへ誘い〈外の世界〉へ戻そうとする。実際、デート後に「僕」は街の光景が不自然ではなくなったと感じ、緑に「君に会ったおかげで少しこの世界に馴染んだような気がするな。」と言っている。このように「僕」は緑によって精神的なバランスが保たれているのだ。

作中で閉じこもりがちの「僕」は「ピスタチオの殻」と形容されている。緑と「僕」がデートの時に訪れるバーDUGで、二人は

ピスタチオの殻をむき、そして食べる。これは緑が、「僕」の閉ざされた心を開かせていることをあらわしている。この事からも緑が「僕」を〈内の世界〉から脱却させようとしている事がうかがえる。しかしながら「僕」は緑の努力も空しく少しずつ〈内の世界〉へと向かってしまう。

こんこん、ワタナベ君、こんこんとノックしてもちょっと目を上げるだけで、またすぐもとに戻ってしまふみたいです。（下巻百九十一頁一行目）

このように、「僕」は緑といるときにも「殻」にこもるようになってしまふ。その傾向は直子の死後さらに強くなる。「僕」は直子の死後ひとり、旅に出る。「僕」は大学という〈外の世界〉を捨て、一人旅という〈内の世界〉を選んだのである。第二節で触れた〈内の世界〉に閉じこもりがちであるという自殺者達の共通点を持ちはじめ、確実に死に近づいている。文章中にも「僕」が死に近づいていることを表わす文が見受けられる。

彼女のイメージは満ち潮のように次から次へと僕に打ち寄せ、僕の体を奇妙な場所に押し流していった。（下巻二百二十五頁二十七行目）

これは直子が死んだため、「僕」は〈内の世界〉と〈外の世界〉のかけはしである必要性がなくなったにもかかわらず、直子への未練が〈内の世界〉を自分の中に残させた事を表わす場面と考えた。その後の

ときどき俺は博物館の管理人になつたような気がするよ。（中略）俺は俺自身のためにそこを管理してるんだ。（下巻

二百三十一頁十二行目）

も同じである。我々はこれを博物館が〈内の世界〉、飾られていたものがその世界の住人と考えた。「僕」は〈内の世界〉との関係を切り〈外の世界〉でやり直せば良かった。しかし自分が〈内の世界〉の人々やそこで起きた出来事を忘れたくないがために〈内の世界〉を自分の中に残したのだ。物語はその後、

僕は今どこにいるのだ？（中略）僕はどこでもない場所の真ん中から緑を呼び続けていた。（下巻百六十二頁十二行目）

という幕切れを見せる。「僕」が〈外の世界〉と〈内の世界〉の間で居場所がつかめず途方に暮れたまま話は終わってしまうのだ。

第六節 「僕の回復」

「ノルウェイの森」はここで終わってしまう。しかし我々はこの作品が〈僕〉によって書かれた二十年前の回想」という構造をとっている事を思い出した。そして我々は冒頭に描かれている三十七歳の「僕」を調べれば「僕」のその後の変化がわかるのではないかと考えた。

まず「僕」がこの本を書こうと決心するまでの流れをまとめてみよう。

三十七歳の「僕」はドイツへ飛行機で向かっていた。飛行機が着陸するとスピーカーからピートルズの「ノルウェイの森」がBGMとして流れてくる。そこで「僕」は十七年前自殺した直子のことを思い出した。しかし「僕」は長い時間の中で彼女に関する記憶を少しずつ失いつつある自分に気づいた。そして「僕」は「直子のこと

を忘れない」という直子との約束を破っている事に気付き、哀しくなり頭が痛んだ。そこで「僕」は過去の出来事をこれ以上忘れないよう物語という形で文章に残すことにしたのだ。そしてそこから回想がはじまる。

まず機内に、「ノルウェイの森」の曲が流れた時の「僕」の反応を見てみよう。

そのメロディーはいつものように僕を混乱させた。いや、いつもとは比べものにならないくらい激し僕を混乱させ揺り動かした。(上巻七頁八行目)

「僕」にはこの時、二十年前の阿美寮から戻った後〈外の世界〉になじめず混乱してしまった場面と同じような症状がでている。このことから「僕」はこの時、阿美寮から戻った時のように自分の居場所がわからない状態にあると考えられる。つまり、「僕」は自分の居場所がつかめなくなつて以来二十年間自分の位置がわからないまま過ごしてきたのである。

次に「ノルウェイの森」が流れたあとの直子に関する回想のシーンを見てみよう。

おい、起きろ、俺はまだここにいるんだぞ、起きろ、起きて理解しろ、どうして俺がまだここにいるのかというその理由を。

(上巻十一頁十四行目)

「僕」は二十年前直子に未練があり〈内の世界〉を捨てる事ができなかった。しかしながら「僕」は同時に頭のどこかで〈内の世界〉からいつかは抜け出さなければならぬと考えていたのだろう。そして前の引用文はその「頭のどこか」が自分に、なぜ自分がまだ〈内

の世界〉に居座っているのか問いかけたものだろう。我々は「僕」が物語を書いたという行動を、過去の世界に居座った自分を〈外の世界〉へと引き離すために行ったものだと解釈した。

こうして「僕」は二十年越しに〈外の世界〉という自分の居場所を見つけることができたのである。

結論

論文の第一章から作中の「第一章」に結びつけられるもの、それは「螢の光」である。「螢の光」は直子の生きる力を示すものである。「僕」が記憶していたものは数百もの光る螢であり、それはキズキといた時の直子の状態を象徴している。しかし「僕」が現実に見たのはたった一匹の螢の淡い光であった。それはキズキが死んだあとの直子の不安定な状態を象徴したものである(これまでは第一章に述べた)。

この「淡い光」は「分厚い闇の中を(中略)行き場を失った魂のようにさまよい続けた」とある。それは〈内の世界〉にいる直子の失われそうな命の灯を表わしたものだ。このことを直子は覚えてくれと言い、よって「僕」はこの「文章」を書こうと決心したのである。

ではそもそも「文章」を書こうとしたきっかけはなんだったのか。それは「ノルウェイの森」という曲を聞いたことである。それを聞きます最初思い出したのは「草原の風景」である。この風景は阿美寮のもので〈内の世界〉のものだといえるだろう。その数十秒後に直子のことを思い出すわけだが、この数十秒という差はなんなの

であろうか。それはおそらく「僕」の精神世界と記憶の差であろう。「僕」の記憶とは二十年前の出来事であり、三角関係が複雑からみあったものだ。その中で「僕は〈内の世界〉にいる直子を愛し、〈外の世界〉にいる縁を全く違う意味で愛していた。二十年後、僕は〈外の世界〉にひたり、〈内の世界〉が精神的にないものとなりつつあった。しかし「ノルウェイの森」を聴き〈内の世界〉という世界を思い出し混乱したのだ。しかし「ノルウェイの森」は二十年という年月によって遠ざかってしまう。よって直子という記憶を思い出すのに数十秒かかったのだ。

直子は「僕」の前から自分のいなくなることと既に理解し、「僕」に「私のことを忘れないで。」と言っていたのだ。直子は〈内の世界〉を理解し〈外の世界〉にいる存在の一人と「僕」をみなしそのようなことを頼んだのである。「僕」はこの約束を果たすために「文章」を書いたのであるが、実はもう一つ理由がある。

それは「僕」の精神を整理するためである。「僕」は二十年間〈外の世界〉につかり〈内の世界〉を忘れていた。リンクという存在ではなくなったのだ。しかし曲を聞き〈内の世界〉の存在に気づいた。よって混乱したのだ。「その風景は「僕」の頭のある部分を執拗にけりつづけている。おい、起きろ。俺はまだここにいるんだぞ。」と作中に書いてある。この事からも、〈内の世界〉というものに関わっていた事を証明するために「文章」を書いている事がわかる。この「頭のある部分」というのは〈内の世界〉だろう。つまり「僕」は〈外の世界〉と〈内の世界〉という二つの世界が存在する事を証明するために「文章」を書いている。

よって「ノルウェイの森」を村上春樹が回想という設定にした理由はこれだ。

——もしも物語の第一章がないならば「僕」は精神的に不安定な状態で終わりその後の「僕」がどうなったか知る術はない。しかし第一章が加わる事で〈内の世界〉の過去の出来事に「僕」は踏ん切りをつけ、〈外の世界〉に戻る事ができたのだ。

よって我々は「作品の末尾部分で混乱している僕の回復を示すために一章が存在している。」との結論に達した。